

Angela Wright: *Mary Shelley*. Gothic Authors: Critical Revisions.

Cardiff: University of Wales Press, 2018. xv + 167pp.

細川美苗

本書はウェールズ大学出版のゴシック小説家に関する入門書シリーズである。著者 Angela Wright はイギリス・シェフィールド大学教授で、International Gothic Association の会長を務めた経験を持ち、著書 *Britain, France and the Gothic, 1764-1820: The Import of Terror* においてフランスとの政治的な緊張関係が生む恐れや恐怖という観点から、Horace Walpole (1717-97) や Clara Reeve (1729-1807), Ann Radcliffe (1764-1823) といった作家によるゴシック小説を論じている。また、2016年にはマンチェスター・メトロポリタン大学教授 Dale Townshend と共に *Romantic Gothic: An Edinburgh Companion* を編纂しているが、上記いずれの本においてもライトは Mary Shelley について論じていない。このような背景から、*Frankenstein, or the Modern Prometheus* (1818) 初版出版200周年に出版された本書は、ライトがこれまでのゴシック小説に関する研究をメアリ・シェリーの一連の小説に関連付ける興味深い著作であることから取り上げた。

本書の特色は『フランケンシュタイン』初版から第3版出版の間に書かれた小説群を、ゴシックという観点から論じていることである。このような試みがメアリ・シェリー研究において不在であったことをライトは問題視しており、ブラックウェル社の *A Companion to the Gothic* (2000) に収録されている Nora Crook の論を除き、ゴシックの伝統という観点からメアリ・シェリーの作品を扱う批評家は、『フランケンシュタイン』のみか、せいぜい *Mathilda* (1819) に目を向ける程度であったと述べている (Wright, *Mary Shelley* 3)。

本書が扱う小説は、『フランケンシュタイン』と、『マチルダ』, *Valperga: or,*

the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca (1823), *The Last Man* (1826) 及び贈答用図書や雑誌に発表された物語である。ライトはそれらが、「典型的なゴシック小説である『フランケンシュタイン』(初版)」(*Mary Shelley* 2) と同様の問題を提起していると論じている。

メアリ・シェリーの小説群に共通して見出せる問題であるとライトが指摘するのは、恐怖や欲望など感情の極限に置かれた登場人物の反応と、それを引き起こす背景としての教育の問題である。本書は1831年までに出版された作品を対象としているが、その期間に出版された小説を章ごとに詳細に論じたのち、‘Conclusion’において1831年以降に出版された *Lodore* (1835) や *Falkner* (1837) にまでも言及しており、著者の強い熱意が感じられた。

政治的、哲学的問題をゴシック小説に織り込む事がロマン主義時代に特徴的である点は、すでに Deidre Shauna Lynch などが指摘している。歴史小説の台頭の影で、社会的に無責任で馬鹿げているといった誹りを受ける中、「ロマン主義時代を通じて、ゴシック小説は Burke や David Hume のような哲学者によって示された魅力的な問いを提起する媒体」(Lynch 49) として活用されるようになったのである。Jerrold E. Hogle も、デイオダティ荘に集ったロマン派第二世代の作家が「ゴシックの活用法を『急進化した』」(114) と指摘しており、当時は懐古趣味であったゴシック小説の枠組みを意図的に活用することには、戦略的な意味があったといえる。ライトの問題提起もこの流れをくむもので、1790年代のゴシック小説の成功を利用し変容させる手腕にこそ、『フランケンシュタイン』の功績があると評価している (12)。

ライトは、「『フランケンシュタイン』におけるゴシック性は名もない生き物の恐ろしい外見にあるのではなく、言語化できぬものを描こうとする試みによって、『人間の内面で作用する何か』の所在を探り分析しようとするところにある」(*Mary Shelley* 48) と論じている。ライトがいう「言語化できぬもの」とは、主に極限状態に置かれた人間の精神状態であり、「激情をどのように制御するのかによって、社会から孤立した、越境者プロメテウスになるのか、適切な社会の構成員になるのか」(*Mary Shelley* 5) が決まるのである。ライトによれば、フランケンシュタインの致命的な欠点は感情を常に優先することである。

その感情は「外見という不確実な指標」(*Mary Shelley* 31)に由来し、彼が外面と本質の区別を理解できないことを示している。そしてこの欠点は、彼の教育に由来するとライトは論じている。生と死、人間と動物、科学と自然、理性と感情といった二項の境界の曖昧化が、小説の主要なテーマであることは繰り返し指摘されているが、ライトはこれを教育の問題へと敷衍する。境界を踏み越える者 (Transgressor) であるフランケンシュタインと彼のダブルともいえる Robert Walton は、読書で得た知識と現実の区別を理解せず、読書で得た知識を実現すべく境界を踏み越え(ようと)して、非現実、つまりゴシックの領域に臨むのである。他方、現実と非現実の区別を心得た Henry Clerval や Elizabeth Lavenza は、破滅を導くことのない理想的な人物である (Wright, *Mary Shelley* 39)。このような対比において、小説は行き過ぎた情熱や非現実世界への没入を制御する理性的な教育の必要性を説いているとライトは看破する。

The Castle of Otranto (1764) や *The Mystery of Udolpho* (1794) と同様、城名がタイトルである『ヴァルパーガ』においては、ヒロインが領地を取り戻すという一般的なゴシック小説の筋を反転させ、城を失うヒロインをメアリ・シェリーは描いている。ヒロインは「優れた教育を受け、慈悲深く、道徳的」(Wright, *Mary Shelley* 69) であり、彼女が領地よりも価値を置く女同士の友情は、一時だとしても、女性が直面する恐怖を消滅させる (Wright, *Mary Shelley* 86)。この点から、メアリ・シェリーはゴシック小説の慣例を刷新し再創造することに成功したとライトは評価している (*Mary Shelley* 86)。本書ではその他の小説や物語の登場人物についても、強い感情に動揺する主人公の行動と教育の問題をゴシック小説との関連から論じている。入門書であるために、歴史的な背景や、小説のあらすじ、メアリ・シェリーの伝記的事実の紹介、および崇高やフェミニズムといった不可避のトピックの説明が論を中断している部分もあるが、強い感情に導かれる主人公が現実と非現実の狭間でどのように振舞うのか、またそれは何故かという教育に関する視座からメアリ・シェリーの小説群を俯瞰する貴重な一冊であり、ロマン主義時代におけるゴシック小説を再考する良書だと思う。

参考文献

- Crook, Nora “Mary Shelley, Author of *Frankenstein*.” *A Companion to the Gothic*, edited by David Punter, Blackwell, 2000, 58–69.
- Hogle, Jerrold E. “Gothic and Second-Generation Romanticism.” *Romantic Gothic: An Edinburgh Companion*, edited by Angela Wright and Dale Townshent, Edinburgh UP, 2016, 112–28.
- Lynch, Deidre Shauna. “Gothic Fiction.” *The Cambridge Companion to Fiction in the Romantic Period*, edited by Richard Maxwell and Katie Trumpener, Cambridge UP, 2008, 47–63.
- Wright, Angela *Britain, France and the Gothic, 1764–1820: The Import of Terror*. Cambridge UP, 2013.